

旅の仲間を見つけるのは難しい。『指輪物語』ではないので、エルフやドワーフなどといった人間でない存在の必要はないが、趣味の合わない人と旅をしても、お互いに妙な気疲れをするだけだ。自分は観光ガイドを確認するみたいに観光地を虱潰しにしていって、趣味はない。御当地の美味しい店を食べ歩くグルメの趣味もない。御土産を買い漁る趣味もない。その上、自動車で移動するのも趣味ではない。何やら悉く一般人の旅行とは趣味が合わないのだ。

表題にもある通り、自分の旅は徘徊だ。俳諧でもある。歩く。他愛ないものを見る。そして、一人悦に入る。恐らく傍から見たら何が楽しいのか分からないかもしれない。その様な旅をする自分なので一人旅が中心にならないかも知れない。だが、今回、自分の趣味を理解してくれそうな仲間が見つかった。ここ数年、飲み友達ナンバー1であるKだ。自分は観光旅行好きでもグルメ好きでもないが、いざ、遊ぶとか食べるとか飲むとかなると、半端に済ませるのは気に食わない。自分が選んで飲む店は、大抵が一晩で約八千円は出費する。それに嫌な顔一つしないどころか、自ら飲みに誘ってくるのがKである。

色々話し合った末、尾道に行き、瀬戸内海を渡って松山へ行く事となった。自分にとっては初めての四国である。

本来、自分は行き当たりばったりの電車派なのだが、行き先が

遠いのと連れのKの主張とで、今回は飛行機で広島まで行く事にした。国内線は数年前に職場旅行で乗ったのが初めてで、今回が二度目になる。慣れてないので、出かける前に、「あれ？ 飛行機に乗るんだと、パスポート必要？」とか、阿呆としか言いようのない考えが頭を過ぎる。流石に本当に用意まではしなかったが、別の面で失敗した。空港では恒例の金属探知機でのチェックである。列に並び始めて気が付いた。ポケットにナイフが入れっ放しだった。キーホルダーについている極小のものだ。以前なら許されるかもしれないが、最近、厳しい。「やっぱ、これって、ダメ？」と友人Kに訊けば、そもそも、なんで、そんなもの持ってたんだ、おまえ？ って顔される。ごもつとも。自分もニューヨークでは、一緒に行った友人に対して同じ感情を持ったものだ。国内旅行で飛行機になど乗らないのが普通の自分は、そこまで考えが及ばなかったのである。新幹線に乗るのに金属探知機は通らない。案の定、ナイフ付きキーホルダーは没収された。自業自得だ。文句を言つつもりもない。

機内で二人で赤の他人同士みたいに別々に新聞を読んでいると、風情も何もなく「アッ！」と言う間に広島空港へと着いた。だから、飛行機は嫌なのだ。どこでもドアで旅行するのにも似て、徐々に旅情を盛り上げていく過程を楽しめない。空港は小さかった。当然だ。国内線だけなのだから。

広島空港からバスで三原まで行き、そこからは電車で尾道へ。

着いて改札を出てみれば、「何じゃ、こりゃ？」と言っほどの人ばかりで駅前には埋め尽くされていた。大林宣彦監督の映画等で知られる風情ある街は想像もできない有り様だ。今日から二日間、「みなと祭」が行われるらしい。よりもよって賑やか嫌いの自分の旅が、この前の広島でも今回の尾道でも狙ったかの如く盛大な祭日のご真ん中の中するとは何たる皮肉。昼食場所を物色して徘徊していても、地元のめぐみ幼稚園によるパレード等で進行を妨げられる始末だ。子どもは可愛いが、この展開は全くもって戴けない。

が、喧騒を逃れて入った魚介料理の店「季らく」は良かった。街の中心からは離れており、客も殆どいなかったので、漸く静けさを取り戻せし、何より、穴子飯と鰯の刺身が実に美味かった。これで千円なのだから、ガイドに書いてある通り、大満足である。珍しく普通の旅行記らしい事を書いてしまったが、美味かったものは美味かったのだから、まあいい。

その後、天寧寺の三重塔などを見て、そのまま、てくてくと坂道を上って千光寺公園へと向かった。ロープウェイに乗れば、たったの三分らしいが、それでは徘徊の名に恥じる。冗談はさておき、余程の高さでなければ、歩いた方が土地の雰囲気味わえるというものだ。これに普通に付き合ってくれるKは、有難い旅仲間である。

二人で町中を徘徊していた時も、こんな事があった。Kが、こ

み捨て場の案内板にある不燃ごみの例を表した絵に不思議なものを見つけた。描かれていたのは、車だった。車？ 車って、不燃ごみと言うより粗大ごみ。と言うよりも、そもそも普通にゴミ捨て場に出すか？ と思って良く見てみれば、大きなアンテナが付いている。ラジコン車だったのだ。普通、例として描くか？ 尾道は、そんなにラジコンのごみが多いのだろうか。とにかく、こんな風に自分と似た感覚で旅の徘徊を楽しんでくれるのが、他ならぬKである。商店街の玩具屋の前に聳え立つウルトラマン・エースの懐かしき姿に驚いたり、屋台の「ポテトフライ」が左右逆に書かれていたのを見た自分が「テポ」だけ目について「テポド」と読み間違えたのに笑ったり。

話は戻して、千光寺公園へ向かう途中である。またもや、Kが見つけてくれた。看板だ。そこには、こう書いてあった。

『絶景ポイントで飲物と占いを

確率九十八% カード占 四百円

お悩み相談 三十分/千円 要予約

これだけでも笑える。飲物と占いという妙な組み合わせに、確率九十八%という微妙な数字。それに、いざ尾道まで来て予約してまで悩み相談する人って、一体・・・しかし、更に続くのだ。

『オヤジワ・ニイさんとイザゴロネ

TEL 〇八四八 二二 一三五六 (↑書いても平気よね)

何て語呂合わせだよ、おい。飲物にも占いにも尾道にも何にも

関係ないじゃないか。二人でウケまくり、早速、自分はこの旅行記に書く為に全文メモし、Kはカメラで撮影した。歩かねば見つからない尾道ならではの楽しみ方！ え？ ちょっと違う？

そんなこんなで千光寺公園の展望台に辿り着く。たこらめん、たごんぶり、と妙に蛸尽くしのメニューの食堂を横目に展望台の上へ。ここから見ると、尾道が瀬戸内の海辺の小さな町である事が良く分かる。が、しかし、性悪の自分達が楽しんでいたのは別の事だった。上から見ていると、ロープウェイを使つて来た人々が見えた。子どもがいた。その後から太めの親が来た。そこで、Kの一言、「あれ、将来、太るな」。おい、お前、何を見てるんだよ、何を！ 失礼だけど、面白すぎるぞ！

一頻り風景と人々を堪能して町に下りようとした時、一角の店の幟が目付いた。みかんソフト。暫く、ソフトクリームを食べたくない。ましてや、蜜柑味。これを食べてから行こうと自分は主張したのだった。展望台の下のベンチで男二人並び、どこぞの野良犬が寄つてくるのを眺めつつ、ソフトクリームを食す。何とも絵にならぬ姿。自分達が楽しければいいのさ。騒音の塊みたいなおぼちゃん連中の様に他人に迷惑かけてる訳じゃない。展望台で便所の案内表示に、「出会いの広場 トイレ」と書いてあるのを見つけて二人で大笑いする程度だ。単に「出会いの広場」にあるトイレはここです、というだけの意味なのだろうが、どう見ても、トイレが出会いの広場の様に読めてしまう。以来、自分達の間で

は「出会いの広場」が「トイレ」の隠語となり、旅行中、トイレに行きたくなる度、「あ、俺、ちょっと出会いの広場 行ってくる」と言う事となった。阿呆。

観光とは無関係な事を大いに楽しみ、自分達は次に御袖天満宮とタイル小路へ向かう。ところが、思ったより遠いのか中々に着かない。歩けば歩くほど、町の雰囲気観光地ではない普通ささを醸し出してくる。この間も他人様の家を見て、何やかや話して笑つたりしていた。徘徊の本領発揮と言いたいところだが、一応、目的地があつて、そこに近づいていく過程として歩き回るならばともかく、何やら怪しい。ずっと真つすぐな道を歩き続け、長江小学校の横を通り過ぎ、更に真つすぐ歩き続け、「これは、おかしい」と思つて止まつた。案の定、道を間違えてた。連れのKも徘徊趣味であり気にしないのか、気にしてるけど呆れ返って口に出さないだけなのか知らないが、ともかくKは有難くも文句も言わず、自分達は来た道を引き返す。

予定外に時間をかけて、御袖天満宮へ着いた。どうと言つ事はない。ただの神社だ。大林宣彦監督作『転校生』の名場面が使われた場所らしいが、自分は観た事がないので知らない。この近くにあるタイル小路も大林監督作『時をかける少女』に登場して有名になつたらしいが、これも観た事がないので知らない。自分が行きたいと思つたのは、そのタイル小路が、以前に観た映画『八月の幻』で登場していたからだ。女性アイドルのイメージビデオ

が元となったアイドル映画で、池袋での単館上映だったこの作品は、単に予告編で見た主演アイドルが以前に付き合ってた娘に雰囲気似てた気がしたので観ただけだったが、敢えてロケ地を探し歩く情熱は持ち合わせないが、偶々、尾道に来たのなら、行ってみようかと思っただけだ。来てみれば、御袖天満宮もロケ地だった。

続いて、タイル小路に行ってみれば、ない。タイルなど一枚もない。案内板があつて、それを読むと、有名になって以来、不心得な観光客が増えて付近の住民への騒音被害となり、撤去したらしい。確かに辺りは普通の閑静な住宅街で、しかも路地なので狭い。ここに馬鹿なおばちゃんやおねえちゃんが来てペラペラ喋りまくれば、いい迷惑だろう。どうやら、自分が買っていた旅行ガイドは情報が更新されてなかったらしい。熱い思いがあつた訳でもなし、工作上、住民の生活が第一だと思つたので、不満はない。道に迷いながら、ここまで付き合わせたKには少し申し訳なかつたが。

そろそろ、いい時間なので駅前に戻る事にする。今日は尾道から駅前発のバスに乗ってしまなみ街道を通り、四国の今治に泊まる予定だ。余裕を持ってバスに乗りたい。バスの時間まで、駅前を徘徊する。マクドナルドはないが、ミスタードーナツがあると聞いた、つまらない事を確認し、例によって、本屋を物色する。ビリヤード専門誌「球」が置いてあつたのには驚いた。この間、

駅周辺では相変わらず大音響で祭のテーマ曲が流れ、入れ替わり立ち替わり、幼稚園や地元企業等々の団体が駅前に設置された舞台上がって踊りを披露していた。嫌でも同じ音楽が何度も何度も耳に入ってくるので、そのうち、自分の脳味噌の中でも自動演奏されて流れるようになってしまった。祭酔いで疲れ始めた頃、バスの時間が迫ってきたのでバス停に移動する。ところが、ふと、視線を下ろしてみれば、案内が書かれていた。何やら祭の関係でか、乗車券を「しまなみ交流館」で買ってから乗らねばならないらしい。焦る。「しまなみ交流館」って、どこ？ 二人で慌てて探し、券売所へ。すると、バスが来るまでの時間がないから、直接、バス停に行けと言つ。行つたり来たり、いい加減にしてくれ。折角、余裕を持って駅前に着いていたのに、結局、バスに乗る為に走り回る羽目に陥るとは。二人で走る。バス停が目に入る所まで戻った時、既にバスは到着していた。俄然、二人は猛走する。ここで乗り遅れたら阿呆もいとこだ。以前の広島帰りの二の舞である。走る。走る。祭の人こみを掻き分け、走る。そして、バスに乗り込んだ。間に合つた。全く、ハラハラさせる展開だ。心身に心臓に良くない。

バスは発車した。未だに祭の熱気を残している尾道を後にする。いざ、来てみれば、尾道も普通の町だった。海辺で坂が多く、狭い路地が目立つ程度で、京都や奈良の様に特に印象的な史跡等がある訳でもない。映画等によって良い印象で描かれた事で評判を

得ているだけとも思えた。旅の最中、Kが言っていた「尾道みたいな坂を人工的に作ればいいんだ」との発言は冗談にしても、他の普通の町でも、映画等を利用した人為的なイメージ戦略に成功すれば、尾道に近い評判は得られるのかもしれない。まるで、某市役所の観光課の如き事を考えさせられた尾道徘徊だった。

大型バスには数えるほどしか乗客がなく、Kも乗車の際の緊迫の展開に疲れたのかあまり喋らない。瀬戸内海に沈む夕日を車窓から眺めつつ、バスは次々と橋を渡って芸与諸島を通り過ぎていく。旅情だ。ええかつこしいの自分は、こういう雰囲気が好きなのである。因島を走っていると、「祝　ポルノグラフィティ　紅白出場」と書かれた横断幕があったりするの、何やら妙に侘しくていい。四国を目前にして来島海峡大橋を渡っている時だった。ふと、Kが口を開いた。

「俺の知ってる人でさ、四十代で、この橋、キックボードで渡ったらしいよ」

あっさりと旅情は吹っ飛び、自分は笑いの渦に呑み込まれた。自転車ならともかく、約五キロある橋をキックボードで渡るとは、それを思いついた事に感心する。

しっかりとオチをつけてから、今治に着いてみれば、尾道とは打って変わって静かだった。既に夕方になってからとも言えるが、それにしても静かだ。音は聞こえない、人は歩いてない。

本当に人が住んでいる都市なのかと少し疑問に思っくらいである。

しかし、日中が音と人の洪水に見舞われていたので、このくらいの方が落ち着いた夜を過ごせるとも言えるだろう。一先ず、今夜の宿である今治国際ホテルにチェックインした後、夕食の店を探しに出た。ここで、静けさが災いした。店がないのだ。あつても開いてない。飲み屋風の店が午後八時に閉店してしまつたのは、首都圏人の自分達には信じ難い事である。今時、八時などという時間は小学生が塾に通つていてもおかしくない時間だ。観光客らしき二人連れの女性が店の前で「ウツソー！」と仰天していたのにも同感である。

たかが八時過ぎなのに暗くなった町で、地元の消費者金融「レタス」の黄緑色のネオンだけが妙に目立っている中、辺りを歩き回って、漸く深夜営業の居酒屋「是食」に入った。客は若者ばかりだ。この町で、夜中に外で酒を飲む輩は若者しかないのかもしれない。客層から予測される通り、酒は安くて不味かった。隣のテーブルで自分と同業者らしき若者が熱く語っているのに二人で耳を傾けつつ、飲み且つ語り合った。

こうして、尾道から瀬戸内海を渡り、今治へと至る徘徊が終わった。

¥ 瀬戸内徘徊 第二日

こう言つては失礼かもしれないが、都会とは言い難い今治には

場違いに思える二十二階建ての高層ホテル、今治国際ホテルで朝を迎えた。建物の高さだけでなく、内装も広さも場違いに良かった。一人旅でも高級ホテルに泊まる事が多いブルジョア気取りの自分でも、浴室に浴槽と別にシャワールームがある所は、ここが初めてだ。単純に考えると、日本一有名な帝国ホテルが最も豪華そうに思えるが、スイート等の超高級な部屋は知らないからともかくとして、普通のシングルやツインの部屋は地方の高層ホテルの方が土地が安いから広いし、窓からの眺めも周囲の高層ビルに邪魔されないのが良い。違つのは、サービスだ。今回の瀬戸内徘徊からは話が逸れるが、未だかつて記憶の限りでは帝国ホテルほどサービスの良かったホテルはない。話を戻し、快適な朝を迎えた二人は朝食後、今治国際ホテルを出た。

今夜は松山の道後温泉に泊まる予定なので、先ず今治駅で電車の時間を調べる事にする。これまた場違いに北方領土返還の横断幕が張られた市役所前を通って駅へ向かった。首都圏と違つてホームレスはいない。それどころか、歩いている人が殆どいない。焼鳥屋と保険会社と病院が多い。この地域のビジネス街で、だから、今治国際ホテルの様な高級ホテルがあるのかもしれない。そんな事を話しながら、自分は渋谷区内の会社宛ての葉書を、わざわざ、今治のポストに入れる。別に郵便局に無駄な労働をさせてやるつなどと考えた訳ではない。東京で出し忘れて、荷物に入れたまま持ってきてしまったのだ。

観光地には乏しい今治の中で随一の観光地である今治城を訪れる。海辺の町に建つ今治城は堀に海水が流れ込む仕組みになっていて、散策していると、潮の臭いが漂ってくる。再建された天守閣と並ぶ日本丸跡に建つ吹揚神社では句会らしきものが催されていた。つくづく、イベントから逃れられないらしい。城を出ようとした時、堀際に妙な風体の中年女性がいた。頻りと意味不明な言葉を発している。ホテルを出た時の前言撤回、どうやら、心病をお持ちのホームレスらしい。こんな所にもいるのかと少しびっくりする。

そして、自分としての今治の本命である。宮脇書店だ。何故、本屋？ 由緒がある訳でもガイドに載っている訳でもない。昨日、ホテルの近くを歩いていた時、偶然に前を通り、その宣伝文句に大いに興味をそそられたのだ。

「本ならなんでもそろつ 全国チェーンの宮脇書店」

本当に何でも揃うのか！と、子どもの難癖の如き思考が自分の頭を過ぎつたのである。一年間に約五十冊の本を読む自分にとつて、本屋の品揃えは一大関心事なのだ。昨日から気になつてならず、今日も今治城に行く前から、「宮脇書店に行こう」とKに懇願していたくらいだ。相当に変人かもしれない。何しに四国まで来てるのやら。それを嫌がりませず普通に付き合ってくれるKも大した男だと思ふ。地元のスーパーが入ったビルの上の階に位置する宮脇書店に興味津々で入店した自分は、早速、ピリヤード専門

誌を探した。一冊まるごとビリヤードに関する記事ばかりの月刊誌は、アニメやミリタリーよりもマイナーで、本屋の品揃えを判断する一つの基準になる。そう思っているのは、自分くらいかもしれないが。結果、なかった。「なんだよ！なんでもそろわないじゃん」と当たり前の事を勝ち誇った様に口にしてみる。時々、自分の精神年齢が分からなくなる。時間に余裕もあり、予想以上に大きな本屋ではあったので、二人で別々に立ち読みなどを続けた。そこで、自分は大発見！文庫の棚に『一九八四年』があるじゃないか！最近、都内に増えてきた防犯カメラに関する報道でも話題に出た監視社会を描いた有名なSF小説である本作は、以前から興味を持っていたが、行きつけの幾つかの大型書店では売っていなかったのである。それが、あった。「なんでもそろつ」の宣伝文句も伊達ではなかったと評価を見直し、嬉々として購入した。地方の書店やCD屋には首都圏では入手困難な意外な掘り出し物が、単なる売れ残りとして見つかったりする。

その後、ドンドビ交差点という妙な名前の交差点が入口になっている繁華街、今治銀座を徘徊する。昨晩も夕食場所を探して歩いたのだが、今日も人はいない。これでやっていけるのか気になる。何せ、或る本屋の前に置かれた立看板の宣伝文句が、こうなのだ。

「DOS/V パーツショップ

インターネット体験コーナー開設中

十分間 百円 同期六十四k接続
いつの時代の話だよ。相当、やばい気がする。どこを歩いても、今治は全体的に寂れた印象を与えるのは否めない。新宿や渋谷の如き騒々しいほどの賑やかさが全てだとは思わないが。その今治にも「八剣伝」や「養老乃瀧」はあるのだから、居酒屋チェーン店恐るべしである。

昼には今治駅から一両編成の電車に乗り、松山へ。入口は後ろ、出口は前と決まっっていて、整理券を取って乗車するという、まるでバスのような電車だ。乗客は、心なし首都圏に比べてのんびりしている。弁当を食べる男子高校生、英語の参考書を読んでいる女子高校生、携帯式の小型扇風機を使いながら『惨殺の金曜日』という危ない題名の本を読む中年男性が乗る車内に、いかにもビジュアル系ロックのファンだと分かる白のブラウスに黒のフリフリのスカート姿で厚底靴を履いた若い女性が妙に目立つ。それら乗客を、いつもの癖で観察して楽しみながら、松山へ着いた。

まずは腹拵えた。五色そうめんの老舗、「五志喜」で花巻そうめんを食べる。松山は、今治に比べて格段に都会だ。通りを歩く人々も多く、店にも活気がある。マクドナルドやスターバックスは勿論、かに道楽まであった。どこに行ってもチェーン店を目にするのは知っている店があつて安心とも言えるが、旅情や地域の独自性から見ると残念でもある。

腹を満たしたところで、松山の本命である。愚陀仏庵だ。明治

二十八年、松山中学の教師だった夏目漱石が下宿し、正岡子規が病氣療養の為に帰省して同居した小さな庵である。日本の作家で最も尊敬すべき存在が漱石だと信じている自分は、四国旅行が決まった時から、四国に行くならば松山だと思っていた。愚陀仏庵は、松山城が建つ勝山の麓にある萬翠荘という大正ロマン漂う洋館のすぐ裏にある。これがまた、行ってみれば、人ばかりだ。愚陀仏庵ではない。萬翠荘でバラ展が開かれていたのだ。つくづく、イベントから逃れられない宿命らしい。雰囲気ぶち壊しだなと思いつつ、賑やかなバラ展を抜け、山の麓を登っていくと、それはあった。緑に囲まれ、こじんまりした2階建ての庵が。中で茶席が設けられていたので、入るのは遠慮して外に腰掛けて感慨深く庵を眺める。一階に漱石、二階に子規が住んでいたらしい。二階は雨戸も閉まつていて中の様子が分からないが、一階は四畳半の一室の二方を縁側が囲み、一方に床の間、もう一方が別の部屋に接している。縁側を下りた所に石灯籠が置かれていた。どうやら、部屋は二つしかなさそうである。ここで、漱石が原稿用紙に向かったのかと思うと、それだけで何とも言えない気分になる。四方を緑に覆われ、ここには街の喧騒もすぐ近くのバラ展の賑わいも殆ど聞こえてこない。今でさえそうなのだから、明治時代はもっと静かだっただろう。閑静な地で、無駄のない素朴な庵に寝起きして創作活動に勤しめたら、どれほど幸せか。実際には漱石は松山中学の教師をしていたのだから、そう安穩でもなかったとは思

うが、未だに漂う静謐な雰囲気は、漱石の作品に合っている気がする。いつか、この様な家に住んで、それに似合う作品を書ける、それに似合う人間になりたいものだ。完全に自分の趣味以外のなものでもない場所に友人Kを長々と付き合わせた後、愚陀仏庵を離れた。

愚陀仏庵から松山城までは登山道歩く。市街地の中にある標高百三十二メートルの勝山に聳え立つ松山城はロープウェイでも行けるが、尾道の時と同じで歩いてこそその旅である。豊かな緑を擁し、一キロ圏内が繁華街を含む市街地とは思えない。繁華街から徒歩数分のまるで緑のない場所に住み、夜は風俗嬢に声をかけられて帰宅せねばならない自分は、駅から少し歩けば、この様な風情ある場所に来られる松山市民が羨ましくなる。昼に松山に着き、愚陀仏庵に長居したので、松山城で費やせる時間は短くなっていった。天守閣には入らず、観光客も帰ってしまつて人の少なくなつた本丸広場をうろつろと見て回る。中々に立派な城で、上手く撮影すれば、時代劇のロケにも十分に使えるぞだ。敢えて四国まで来るかどうかという問題はあがるが。

時間も遅くなつてきたので、今夜の宿のある道後温泉に移動する事にする。普通の人ならば路面電車の伊予鉄道に乗るのだろうが、自分達はまた歩く。城の搦め手にある乾門から山を下り、真つすぐに平和通りを二キロ以上歩く。途中、相変わらず下らないものを見ては話題にする。一枚九十八円の激安Yシャツ、道端の

ブロック塀の上に放置されたおにぎり、などなど。やはり、ここでもサンクスやローソン等のチェーン店はあった。

歩き疲れて言葉少なになつてきた頃、日本最古とも言われる温泉街、道後温泉に着く。この宿こそが今回の旅の大本命、大和屋別荘である。四国に旅する事が決まり、ガイドブックに目を通していた時だ。見開き二頁で大和屋別荘が紹介されていた。読んでみれば、徹底的に和風に拘つた客室で、テレビや冷蔵庫は格子戸で隠され、電話は漆塗りの特注品だとか。完全に自分の趣味のど真ん中を的中した。家を持つならば畳部屋に障子窓は絶対で、玄関も引き戸ガラガラに憧れ、いずれ年頃になったら普段着も和服にしたいと思つている意外に和風趣味な自分は、一度、この類の本格的な和風旅館に泊まつてみたいと思つていたので。一泊二食付きで約四万円からの高額だが、今だからこそできる経験である。それからは自分の中で、この旅は大和屋別荘への宿泊を中心に回り始めた。信用を重んじるのか、電話予約の後、和紙の封書による案内が自宅に送付されて事前に予約金二万円を振り込む。期待は否応なく膨らんだ。その大和屋別荘に、今夜、泊まるのだ。

浴衣姿の中年男性の一群が歩き回る典型的温泉街を抜け、目的地を探していると、前を数人の旅行者が歩いていた。それだけなら不思議はないが、その中の一人が中年男性でありながら、全身ピンクの服に身を包んでいる。靴までピンクだ。趣味の悪さに呆れつつ、歩いていけば、ピンク男は一軒の建物の通用口の如き中

へと入つていった。通り過ぎて見てみれば、その建物こそ、大和屋別荘だった。外見は、それほど和風でもない。少々、意外な感を持ちつつ、正面入口を探すが、見つからない。「さっきの所だろ」とのKの言葉通り、ピンク男が消えていった所が入口だった。

恐る恐る入つて名前を告げると、実に丁寧な応対で接してくれる。所謂、フロントはない。直接、部屋に通され、抹茶と和菓子を戴く。気のせいか普通の旅館より美味い。早速、部屋の中を物色し始める。ガイドにあつた通り、テレビも冷蔵庫も格子戸に隠され、電話は漆塗りのだ。ポットも竹細工で覆われている。男二人の宿泊には無用とも言える和風な鏡台が置かれ、トイレの前には手水鉢まである。但し、完璧ではなかった。窓際の一隅には避難用縄梯子が入つた赤い箱が置かれ、窓の外には温泉街ならではの水商売の店の看板が見えていたのだ。目立つピンク色に大きな文字で書かれた「重役室」の看板には興醒めさせられる。宿に責任はないが、雰囲気ぶち壊しである。これだから、日本人の感性は疑われるのだ。とは言え、障子を閉めてしまえば目にはつかない。嫌な事からは目を逸らして、折角の宿の一夜を楽しむ事にする。

先ずは大浴場で一風呂浴びる。幸運にも自分達の他には誰もいない。粒塩マッサージや真っ黒色の炭シャンプーを試しつつ、ゆつたりと旅の疲れを癒した。大浴場を出た通路には、生ビールサーバーが置かれている。これが何と無料で飲める。陶製の力ップで風呂上がりの一杯を戴く。これは宿泊客に良識がないとで

きないサービスだ。一般の温泉宿で同じ事をしたら、酔っ払いが続出する。勿論、良識ある自分達は一杯だけ飲んで、部屋に戻った。

夕食だ。実を言うと、所謂、旅館の料理が自分は嫌いだ。品数を出せば豪華なのだと言わんばかり、土地や宿の独自性もなく無闇矢鱈と卓上を埋め尽くし、品も何もあつたものじゃない。だが、大和屋別荘は違つ。京風の薄味が基本の料理はどれも美味で、盛り付けも手が込んである。それに、器が素晴らしい。ビールを入れるコップは白い器に花弁の様な文様の穴が開いている。一見すると、穴から零れてしまいそうだが、実は中がガラスになつていて、その穴から中のビールが見える趣向だ。酒好きの自分達が冷酒を頼むと、これを冷やす氷入れには繊細な鳥の柄が彫られていて、目立たない場所への細やかな気配りに、一々、感嘆の声を上げさせられる。雰囲気のある部屋に本当の意味で贅沢な料理に気を良くした自分達は、すっかり興が乗つて大いに語り合つた。

夜、眠くなるのが子ども並みなKは早くに夢の世界に陥つた。残つた自分は、ビールを飲みながら、宿が用意してくれた夜食を食へ、のんびりとテレビを見る。東ティモールに住む少女、テレビザについての番組だ。紛争に一応の終結を見たものの失業率七十%という有様の国で、彼女の一番大切なものはアメリカ人ボランティアからの手紙だと言つ。切なくなる。同じアジアで苦境を生き抜いている健気な子どもがいる一方、自分達は贅沢に飲み食

いをして、のんびり過ごしている。知り合いのインド人の少年の事を想つた。彼は勉強がしたくても家の手伝いがあつてできず、大きくなつた今も文字が書けずに手紙は絵だけで送つてくる。自分の旅自体が悪いとは思わない。ただ、それと正反対の世界に住む人々がいかに多いかを、いつも自分達の心と頭の一隅に留めておかねばならないのだと思つ。

いずれにしろ、自分は幸せだ。そんな想いを噛み締め、今治と松山を徘徊した一日は終わろうとしていた。

¥ 瀬戸内徘徊 第三日

大和屋別荘は朝から素晴らしい。朝食に定番の鮭、海苔、豆腐の他三つ四品と出てくるのは他の宿でも同じだが、それが美味いだけでなく、最後にコーヒートケーキのデザート付きなのだ。和風旅館で和風朝食に、コーヒートケーキには違和感もあつたが。

居心地のいい宿で寛いでいたい気もしたが、今日は旅の最後の日だ。帰らねばならない。ゆっくりしすぎて帰りが遅くなると、翌日からの仕事が辛くなる。自分達は荷物を纏め、丁重な挨拶を背に大和屋別荘を出た。窓から見える「重役室」の看板は気に食わなかったが、総じて落ち着いた快適な宿だった。親孝行に両親を連れて来たいが、諸般の事情により、それができないのが残念だ。

宿を出た後は、道後温泉を徘徊する。意味もなくぶらぶらするには手頃な広さで芝生の綺麗な道後公園は、湯築城跡でもあり、武家屋敷や土塁が復元されていて結構、面白い。愚陀仏庵でも思った事だが、昔の家屋は実に簡素だ。物質的には豊かでなかったとしても、「足るを知る」精神とでも言うのか、今より精神的には豊かで平穩だったのではないか。物に囲まれすぎると物に振り回される。だから、安易に借金して買い物をする輩が後を断たない。連日、金貸しの宣伝が堂々とテレビで放送されるといっなのは正常な感覚では信じ難い事だ。武家屋敷に近づくと、突如、どこからともなく、「月曜日は閉館です」の声。きよるきよる見回してみれば、頭上にセンサーが設置されていた。面白半分にもセンサーの下を通して反応させてみたりする。つくづく、自分の精神年齢が分からなくなる。それにしても、特別な文化財でもない建物に、随分と無駄な金をかけるものだ。

道後温泉の象徴的建物とも言える道後温泉本館も見に行った。明治二十七年に建築された木造三層楼の共同浴場だ。屋上にある太鼓櫓の振鷺閣の窓は赤いギヤマンを嵌めた障子で、建築当時はネオンのない湯の町に異彩を放つたらしい。重厚な風格のあるその姿は、どこことなく映画『千と千尋の神隠し』の湯屋に似ている。温泉に入るなら、ここに来た方が雰囲気を楽しめたかもしれないと思いつつも、外から見るだけにした。こんな建物ばかりの温泉街ならば、もっと味があっただろう。日本で旅行する度に思うの

は、どこもかしこも現代の素っ気ない町並みになってしまつて和の趣が失われているという事だ。普通に町中で時代劇が撮影できる場所があつてもいい。

昨日は歩いて来たが、今日は道後温泉駅から路面電車に乗る事にする。地元の交通機関を利用するのは、それはそれで楽しかったりする。単に歩き疲れたとも言えるが。

松山市街に着いて高島屋で性懲りもなく本やDVDを物色した後、昼食の為に街に出た。讃岐うどんの店、「川福」である。本場は高松なのだが、ここも高松の老舗の支店らしいから、東京で食べるのとは違つ。店内は立ち食い蕎麦屋を思わせる狭さで造りには味も素っ気もないが、うどんの味は悪くなかった。友人Kは、かなり気に入った様子だ。

四国らしい食べ物を食べたところで、松山公園をぶらぶらする。松山競輪場で怪しげな賑わいを見せている公園内を当てもなく歩き、松山市営球場が中に入らなくても外から見られる事を発見したりする。掘端のベンチは地元の人々が利用する場所らしく、女子高生が弁当を食べていたり、カップルがいちゃついたりしている。観光地というよりは公共施設が集まつた場所なので、特別な事は何も無い。国立病院四国がんセンターや公務員宿舎を見たところで、どうにもならない。それでも、歩いてしまつて自分が自分の旅だ。友人Kは本当に不満がないのか、少し不安になる。一回りしても、未だ空港行きのバスの時間には早い。Kは、バスが

出る松山駅前の喫茶店で時間を潰そうと言う。それも悪くないが、徘徊趣味の自分は未だ歩き足りなかったので、ここから約一時間は別行動を取る事にした。

早速、自分はどこへともなく歩き出す。松山駅前交差点を左折して、北上した。連れがいないと会話できないのがつまらないが、誰に気兼ねせずに徹底的に自分の速さで自分の行きたい場所に行けるのは気楽だ。何せ自分は信号が変わると曲がってしまったり、可愛い女の子がいるとついていってしまったり、気に食わない奴が前を歩いていると曲がつてしまったりする。普通の神経の持ち主では付き合わせられない。そんな訳で一人になって暴走し始めた自分は、ショッピングセンターらしきフジグラン松山の前の駐輪場で二人の女の子が自転車を利用して平気で見ているのを見て、フジグラン松山に入る。理由を説明するのは難しい。単なる勢いだ。青果売り場をうろちよろしたり、例によって本屋に入ったり。その後も駅前に戻ってコンビニで立ち読みしたり、駅前スタジアムのバッテリーセンターに屯す男子高校生を見たり、走り過ぎる自転車の女子高生に見惚れたり、松山でなくてもできそうな事を一頻りして一時間が過ぎた。

何をしてたのか分からぬ時間を過ごして松山駅前に戻り、Kと合流して松山空港へ向かうバスに乗る。すっかり疲れきった自分達は口数も少なく、バス、飛行機、電車を乗り継ぎ、各々の自宅へと帰っていったのだった。

今回の旅は、気の合うKと旅をする事自体が目的で、場所は後から決まった。社会人になって何年も経つと、色々嫌になる事が積み重なってくる。合わない人々と付き合わざるを得ない事も少なくない。その上、今の自宅がある街は地域の盛り場の一つで、私生活においても便利ではあっても落ち着かない感じがしていた。一人旅もいいが、気の合う人と一緒に、喋りたい時には喋って、喋りたくない時には喋らない、そんな落ち着いた旅がしてみたかった。この旅行記を書いていて気付いたのは、文章にKが殆ど登場しない事だ。別に自分のペースだけで振り回していたとも思えないし、彼に個性がない訳でもない。交通機関や今治のホテルの手配をしたのも、食事場所を決めたのも、Kだ。自分が強く主張したのは、愚陀仏庵と大和屋別荘だけである。旅に対する二人の姿勢が似通っていたから、結果的に目立たなかったのだろつ。必ずしも普通の観光旅行らしくない行動で無理なく二泊三日を過ごせたのは、Kならではの事だ。

こうして、瀬戸内の徘徊は終わった。

数日後、自宅に一枚の絵葉書が届いた。道後温泉の宿、あの大和屋別荘からの礼状だった。つくづく、気配りの行き届いた旅館だと、全く感心させられる。更に七ヶ月以上も後、年賀状までが送られてきた。一泊だけの宿に、ここまでされたのは生まれて初めてだ。今後、松山方面に行く人がいれば、是非、大和屋別荘を勧めたい。勿論、良識ある「大人」に限ってだが。